

次の文章を読み、設問に答えなさい。

国文学者島津久基は、「国文学と註釈―「つれづれなるままに」―」（大正十五年（一九二六））という論文のなかで、最近（大正頃）の注釈書が、「つれづれ」をたいてい「退屈」の一語で片付けてしまうことに、「我々国文学に携はる者自らの罪を深く感ずるのである」と言っている。

島津は言う。古典を語彙レベルで分析・考証する、いわゆる訓詁註釈という研究態度はたしかに古めかしいし、そこに終始しては意味がない。だが、「その不備を補ふことも、今日の我々に残された仕事の一面でなければならぬ。否、真の意味の註釈はまだまだ成し遂げられてゐない」。ここには、訓詁註釈を軽視した内海や沼波の仕事が、明らかに意識されている。そして、訓詁註釈を尽くしたうえで、さらにその作品を鑑賞・批評するところが、「真の註釈」だと言うのである。

そこで島津は、中古・中世文学における「つれづれ」の用例を広く分析したうえで、「つれづれ」とは、「しづかな余裕のある気持ちではあるが、何となく落ちつかぬやうな、物足りぬやうな、心細いやうな、慰めを求めてゐるやうな、さりとて自らそれをどうすることも出来ない、かなり複雑した繊細な心境」であると述べる。また「退屈」の意を表した用例も稀には見られるが、それは「決してこの語の内容の主体、中心ではない」とも言っている。

島津のこれらの考証は、第一章で述べた私見と照らし合わせてみても、その方法論といい結果といい、基本的に同意できる点も多い。しかし彼はそこからさらに進んで、「つれづれ」をある特別な状態であると説く。す

なわち、

兼好の「つれづれ」は、まぎるる方なくただ一人ある状態である。心を捉へらるべき外部生活の世界から暫く全く解放されて、一人静かに自分をみつめることの許された時間ではなからうか。

と、自己を内省することができると言っているのである。また別の箇所では、「ほんたうにひろく深い思索の出来るのは唯この時のみである。ほんたうに豊かなそして透徹した人生の観照の出来るのもまたこの時である」とも言っている。

このような「つれづれ」の解釈は、十七世紀の「静寂の境地」説に近いとも言える。しかし、その拠って立つところは異なっている。島津は以下のように続けるのだ。

あらゆるよき芸術、よき哲学、よき宗教の創生、それは「つれづれ」の心境を度外視しては説き得ない。何となれば、これは人性本然の姿の、縦へ全体でないまでも、それが実相に於てのみ顕るる生命の躍動であり、又かれはその偽りなき表現であるからである。

「つれづれ」の状態が、いわば真なるもの、善なるもの、美なるものを生み出すための心的環境として捉えられているのが見て取れる。

これはたとえば、フェノロサの『美術真説』（明治十五年（一八八二）刊）に、美術の性質なる者は、その事物の本体中に在りて存するや、疑ひを容れず。而してその性質たるや、静坐潜心してこれを熟視せば、神馳せ、魂飛び、爽然として自失するが如きものあらん。

などと説明されるような、美術鑑賞における「静坐潜心」の必要性の問題を想起させる。つまり、同じく「つれづれ」に「静寂の境地」というような意味を見出しながらも、十七世紀のそれは儒教・仏教・老荘といった東洋的な「静」の思想に立脚していたが、島津のそれは、哲学のみならず芸術一般にまで拡張された、西洋的な「静」の思想の影響を受けていると見られるのである。いまこれを、「新・静寂の境地」説と呼んでおこう。

フェノロサの著書をはじめとする西洋の芸術論は、当時の文学論にも多大な影響を与えたが、その影響を受けたものの一人に、評論家の島村抱月がいる。その「観照即人生の為也」（明治四十二年（一九〇九））という論文には、次のようにある。——われわれの人生には悶々と思ひ悩むことがある。しかし、それをそのまま表現しても芸術にはならない。

かくの如き悶々の炎を、そのまま観照の域に移す。そのあはひから始めて芸術になる。言はば、今までの赤熱を白熱にするのである。……観照とは、言ふまでもなく単に見聞することとも違ひ、単に実行することとも違ふ。部分的現実即して直ちに全的存在の意義を瞑想する境地である。

この「観照」についての考えは、島津の「つれづれ」説の拠って立つところをよく説明しているであろう。

島津論文の影響は、特に評論家たちの『徒然草』観に顕著に認められる。たとえば小林秀雄は、のちに『無常といふ事』に収められる「徒然草」（昭和十七年（一九四二）初出）と題するエッセイのなかで、「兼好にとつて徒然とは、「紛るる方なく、唯独り在る」幸福並びに不幸を言ふのである」とし、次のようにも言う。

「つれづれ」という言葉は、平安時代の詩人らが好んだ言葉の一つであったが、誰も兼好のように辛辣な意味をこの言葉に見付けだした者はなかった。彼以後もない。……徒然草の二百四十幾つの短文は、すべて彼の批評と観察との冒険である。それぞれが矛盾撞着しているというようなことは何事でもない。どの糸も作者の徒然なる心に集まってくる。

小林によれば、「つれづれ」とは、兼好の「批評と観察との冒険」を成り立たせるための心身の環境である。では、なぜそれが「幸福」であると同時に「不幸」でもあり、また「辛辣な意味」を帯びることになるのか。それは、兼好が鋭利な刃物のような批評眼をもっていたからである。「つれづれ」であることによつて、「目が冴えかえつて、いよいよ物が見えすぎ、物がわかり過ぎる辛さ」、それが彼にとつての「不幸」なのである。そして、古今東西に類を見ない「空前の批評家」としての兼好が、その天才的な眼力のために思わず発してしまふ「批評精神の毒」を、小林は「辛辣な意味」と言ったのである。「つれづれ」とは、そのような兼好の切れ味の鋭い批評が生み出される緊迫した場なのであり、けつして「退屈」などという生ぬるい状態ではない。

また、小林とほぼ同時代の評論家唐木順三は、「兼好」（昭和三十年（一九五五））と題する評論のなかで、「つれづれ」とは、「すさび（荒び）」

とほぼ同義であると述べる。兼好が生きた時代は、鎌倉末期の動乱の世。「人心もまた荒廃し殺風景極まる時代、王朝宮廷の文化が極まり闌れ、いまや滅亡に瀕して手のつけやうもな」い時代であった。慰みごとに耽溺してそこから逃れようとしても、結局はまたものすさびの現実に引き戻される。この事実を自覚すれば、「単に己が時代や人心の荒廃、無聊としてではなく、時間といふもの、生起といふもの、人心といふものの根底としての「すさび」がみえてくるであらう」と言う。そして、

兼好は右のやうな「すさび」の感得において、「つれづれ」を言った。彼は宗教家ではない。一箇の芸術家、批評家であった。荒びからの逃亡の無益、慰めごとの結局は無益を感じ取って、むしろすさびに住し、すさびを主とした。それが彼の「つれづれ」の出所であった。

と述べるのである。「静寂の境地」とは少し違うかもしれないが、しかし「つれづれ」を、どこか達観した境地であると解釈していることに変わりはない。そしてここでも、兼好は「一箇の芸術家、批評家」と評されているのだった。これは小林の評論からの影響もあるかもしれない。

このように昭和前期の評論には、兼好の「つれづれ」なる態度に、芸術家・批評家としての自己内省や、人生観照の精神をオーバーラップしたものが見出される。評論家が兼好に、みずからの理想を投影している部分も大きいであろう。

評論家たちが論じたこのような兼好像は、国文学の世界に逆輸入されていく。たとえば富倉徳次郎『類纂評釈徒然草』（昭和三十一年へ一九五六〇刊）では、「生活・人事・技能・学問は仮象的な人生の営みに過ぎず、「つれづれ」こそ人生の本質的な時なのである」などとある。再び、「つれづれ」

が『徒然草』の主題のように解されている。

そしてこのような「つれづれ」解釈は、「孤独で閑暇な「つれづれ」の境地」（『徒然草を読む』、昭和五十七年へ一九八二〇刊）などと表現する永積安明あたりまで、ひとつの系譜として続くのであった。

しかし、こうした新しい兼好の「神格化」に対する国文学界からの揺り戻しは、すでに昭和三十年代後半から四十年代前半にかけて起こっていた。たとえば国文学者安良岡康作は、『徒然草』の執筆動機や意識の全体を「つれづれ」という言葉に収斂させようとした小林秀雄の評論について、「つれづれ草における、作品としての統一は、そういう一語句によって代表させるには、あまりにも複雑である」（『徒然草』昭和三十六年へ一九六一〇）と批判した。

そして、近代における徒然草注釈書の金字塔とも言うべき『徒然草全注釈』のなかで、序段の「つれづれ」について次のように述べる。

これを、清閑とか、閑寂とか、悠々自適とか、「まぎるるかたなく、ただひとりある」（第七五段）、心境とか解して、何らかの価値ある生活感情を認めようとするのは考え過ぎであろう。することもないやりきれなさ・所在なさ、随筆の執筆を促す動機となったのである。

「つれづれ」に崇高な精神的境地を認めず、「することもないやりきれなさ・所在なさ」をその原義とする点で、「退屈」説への回帰と言ってもよいだろう。芸術家・批評家のようなイメージであった兼好が、再び普通の人間に戻ったという印象である。

また、安良岡とほぼ同時期に、同じく国文学者の井手恒雄は、「今日、

徒然草の読者・研究者は「つれづれ」の語にあまりにも深い意味を与えず
ぎていはすまいか」（「つれづれ」の意味）昭和四十年（一九六五）とし、
もう一度、鈴木弘恭の「退屈」説に戻る必要があると説いた。

そうして、『徒然草』のなかの「つれづれ」の用例は、すべて「退屈」
の意で解釈できることを論証しようとする。たとえば序段は、これは私が
「退屈しのぎ」に書いた「ものぐるほしき」（意味不明の）文章ですという
予防線を張って、読者の批判を回避しようとしたのだという。それが本当
に「退屈しのぎ」の、「ものぐるほしき」文章であったかどうかは、ここ
では問題ではない。しかし、兼好はそう言っているのであるから、それを
言葉どおりに受け取るべきであって、「兼好法師独自の「つれづれ」の境
地だとか何だとかいうのは、見当ちがいでいうものではないか」（「つれ
づれ」の誤解）昭和四十一年（一九六六）と論じている。

いずれの論も、『徒然草』の主題が「つれづれ」の一語に集約されてい
るといふ、重い解釈の風潮に対して、「退屈」説を主体とした軽い解釈の
ほうに大きく舵^{かじ}を切りながら、『徒然草』という作品のもつ内容の多様性、
構造の複雑さを主張したものである。

近代以降のこうした解釈の転変の果てに、第一章で紹介したような現代
の徒然草注釈書の所説が定着する。すなわち「手持ち無沙汰」「所在ない」
といった、「退屈」系の解釈である。

現在、文部科学省検定済みの高校国語教科書を発行している会社は、九
社ある。高校国語教科書は、「国語総合」「古典A・B」「現代文A・B」
「国語表現」などの科目に細分されるが、このうち「国語総合」は、現代
文と古典（古文・漢文）がほぼ等分に配され、基本的に必修科目として指
定される教科書だ。

そこで九社の「国語総合」の中身を、各社のホームページを利用して調
査したところ、九社すべてが、『徒然草』を教材として採用していること
が確認された。『徒然草』は古文入門書として、現在も不動の地位を保っ
ていると言える。

そして、それら『徒然草』の教材には必ず、序段が含まれている。とすれ
ば、こういう推論も十分に成り立つであろう。高校生が「つれづれ」とい
う古文単語に最初に出会うのは、この序段の学習においてである、と。む
ろん、中学生の段階で学習する場合もあるが、状況はおそらく同じだ。
「つれづれ」という言葉の存在を、彼らは『徒然草』序段によって知る。
かく言う私も、たぶんそうであったろう。では、彼らは「つれづれ」をど
のように理解しているであろうか。

私は先頃、次のようなアンケートを、勤務先の大学の文学部二年生八五
人に実施した。まず『徒然草』序段の本文を示し、そのあとに以下のよう
な質問をしたのである。

「つれづれ」という心情について、あなたがイメージするのはどれですか
（一つのみ）

①退屈である。時間があるのにすることがなく、つまらないと思っている
状態。

②もの寂しい。どこか心が満たされない気分であり、もやもやとしている
状態。

③リラックスしている。のんびりと気ままな気分であり、落ち着いている
状態。

八五人の答えは、次のような内訳であった。①四七人、②一九人、③一九人。①は「退屈」、②は「もの寂しい」、③は「リラックス」がそれぞれキーワードと言えよう。このうち全体の約半数が、①の「退屈」を選んだ。

これは、「つれづれ⇨退屈」という、高校生のときに覚えた古文単語の知識を、そのまま適用したのだと考えられる。「退屈」説は、現在進行形で続いているのだ。

以上、近代から現代にいたるまで、「つれづれ」という言葉がどのように解釈されてきたかを見てきた。そこにはその時期の思想や文学観のトレンドが、そのまま反映していることが分かったと思う。とすれば現代の解釈も、じつは長い徒然草解釈の歴史の一コマでしかない。今後も世界観や美意識が変容していけば、解釈も更新されていく可能性は十分ある。解釈というものの面白さ、そして怖さはここにある。

解釈というものは掴みどころがないものである。では、そのような正解が変動する問題を考えることに、どれだけの意味があるのか、という疑問も浮かんでこよう。あるいは、それは学問と言えるのか、と。

たしかに、一理ある。だが逆に問おう。確固とした正解が出る問題を考えることだけが、ほんとうに意味のあることなのか。正解の出ない問題に取り組むことは、ほんとうに意味のないことなのか。

確固とした正解が出ないからこそ、古典はずっと読み継がれてきた。簡単に正解が導き出されるものは、その時代には価値あるものとしてでもはやされているかもしれないが、何百年という時の審判に堪えることができない。たとえば、戦前は名著として読まれていたものが、戦後になってパタリと読まれなくなったという例は、けっして珍しいものではないのである。

ほんとうの古典は、その時々々に価値を見出される、いい意味での「ゆるさ」を備えている。ゆえに絶対的な正解はなく、相対的な正解しか出ない。しかし、たとえ相対的なものであれ、その正解を求めるといふ行為自体に、じつは大きな意味がある。人間や社会、生き方や美意識といった、すぐれて現代的な問題について内省するきっかけを、古典は与えてくれるからだ。『徒然草』で言えば、恋愛、地位、名誉、孤独、虚偽、友人、親子、節義、臆病、慢心、飲酒、慳貪、豪胆……そういったさまざまなテーマが思い浮かぶ。そして正解が出ないからこそ、それらの問いは永遠に続くのである。

いま、自分の立っている場所を疑え。そしてその是非を問い直せ——。本書で論じてきた「つれづれ」問題は、とてもとても小さなテーマではあるが、ある意味普遍的な課題を、われわれに自覚させてくれるものである。

（川平敏文『徒然草——無常観を超えた魅力』より）

設問Ⅰ この文章を三三〇字以上四〇〇字以内で要約しなさい。

設問Ⅱ 正解の出ない問題に取り組むことの意義について、この文章をふまえて、あなたの考えを三三〇字以上四〇〇字以内で述べなさい。